

OHOMURA-TSUKADA

松本市大村塚田遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1992・3

松本市教育委員会

OHOMURA-TSUKADA

松本市大村塚田遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1992・3

松本市教育委員会



第7号住居址　南から



第10号住居址　南西から



第2号住居址　南東から



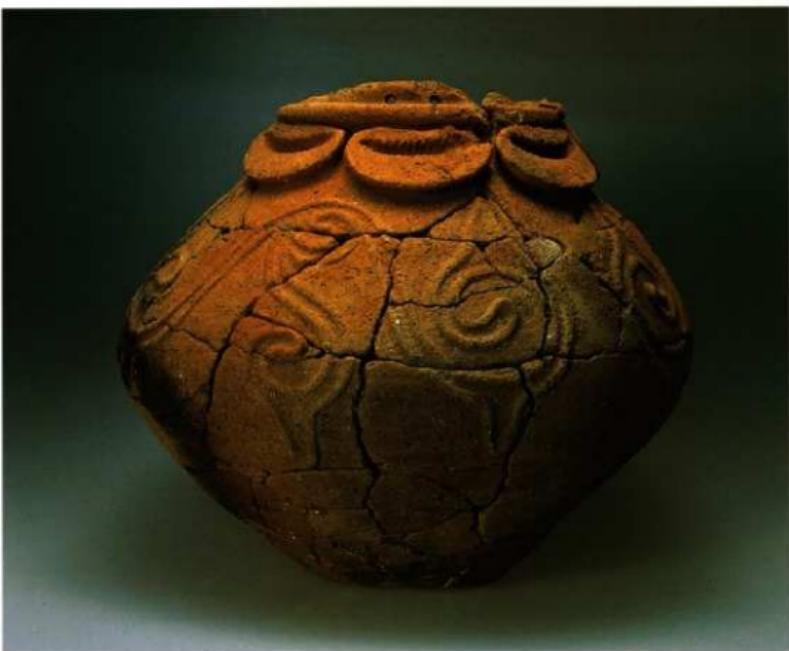
第12号住居址　南西より



釣手土器 第8号住居址出土



埋設された土器 第38号住居址



ピット内埋設土器 第36号住居址

この有孔鋸付土器は口縁部と底部が欠けているものの、ほぼ完形で現存高34.5cm、鋸部分径21cm、胴部最大径39cmで、推定口径18cm、推定底径12cmの胴中半部が最大径となる土器である。この土器は、鋸上部でなく鋸部に孔が空き、胴中半部が最大径となる言わば樽形から鉢形への変遷過程の中間形式的な器形であり、鋸上部に空く孔も2個ずつ、4単位と少なく、これも孔が鋸上から消失するという変遷過程の中の特徴である。

文様は鋸直下に子安貝状の突起が6～7単位付き、その下部から胴中半部にかけては、基本的に隆帯で渦巻文を4個続けた文様に、両側が上を向く剣先状文様、中央がS字状文様を連ねた文様が3単位付けられている。達なる3文様の下部分も下向きに剣先状に突出している。子安貝状突起中や胴部文様の隆帯には半截竹管による結節状沈線（押し引き沈線）が充填されて、剣先状文様の外側にも付けられている。文様的に見るならば、胴部文様は唐草文土器2段階のもの、隆帯間や外側に結節状沈線を付けていく手法は1段階的なもので、これから見ても唐草文土器2段階（曾利II）の古い時期の土器と考えられる。なお内面の一部に赤色塗料が塗られた痕跡が残っている。

序

松本市街の北東に位置する大村地籍は、過去開発に伴う発掘調査が幾度となく行なわれており、そのほぼ全域にわたって遺跡が分布していることが知られておりました。そのうちの一つに塙田遺跡も含まれていますが、この度当地には場整備事業が及ぶことになりました。そこで文化財の保護を図るため、松本市が女鳥羽川土地改良区より委託を受け、松本市教育委員会が事業に先立って発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行なうこととなりました。

発掘調査は市教育委員会によって組織された調査団により、平成2年11月から翌3年2月末の長きにわたって行なわれました。作業は多量の湧水と、冬の寒さ、また降雪に悩まされるなど困難を極めましたが、参加者の皆様の並々ならぬ御尽力により無事遂行することができました。その結果、縄文時代の大集落を発見、また同時期の土器などを多く得て、多大なる成果を収めることができました。これらの資料は、今後地域の歴史解明に大変役立つ資料となることでしょう。

しかしながら本調査の終了と同時に、塙田遺跡は消滅してしまいました。私たちの生活を豊かにする開発事業と、それによって失われる遺跡の保護という両者の矛盾のなかで、文化財保護に携わる者は苦惱を深めております。本書を通して、文化財保護への気持ちを感じて頂ければ、幸いに存じます。

最後になりましたが、厳寒の苛酷な状況のなか発掘作業に御協力頂いた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大な御理解を頂いた女鳥羽川土地改良区、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成4年3月

松本市教育委員会 教育長 松村好雄

例　　言

1. 本書は平成2年11月12日から同3年2月22日にかけて行なわれた、松本市大村に所在する塚田遺跡の緊急発掘調査報告書である。なお市内に同名の遺跡が存在しており、混同を避けるため、“大村塚田遺跡”とした。
2. 本調査は平成2年度団体営土地改良総合整備事業に伴う発掘調査であり、松本市が女鳥羽川土地改良区より委託を受け、松本市教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は第1章：事務局、第2章第1節：森義直、同第2節：久保田剛、その他について高桑俊雄が行なった。また調査担当者の新谷和孝氏には祭壇に関する一考を執筆して頂いた。なお有孔鉢付土器に関する所見は島田哲男氏にお願いした。
4. 本書作成に関わる作業分担は次に掲げるとおりである。

土器復元：五十嵐周子
造構図整理・トレース：石合英子、開嶋八重子、村山牧枝
図版作成：堤加代子、丸山恵子
表作成：上條尚美、三村孝子、久保田剛
造構写真：新谷和孝
5. 遺物の写真撮影は宮崎洋一氏による。
6. 今回の調査にあたっては桐原健、会田進、原明芳、島田哲男、百瀬忠幸、山越正義、大沢哲、浅輪俊行、山本紀之、以上の方々から現地にて御指導を頂いた。
7. 本書の編集は事務局が行なった。
8. 本調査に関する出土遺物及び図類は松本市教育委員会が保管している。

目 次

序

例言

目次

第1章 調査の経過

第1節 事業の経緯と文書記録..... 2

第2節 調査体制..... 3

第2章 遺跡の環境

第1節 調査地の位置..... 4

第2節 地形・地質の概説..... 5

第3節 周辺遺跡..... 8

第3章 調査成果

調査の概要..... 11

遺構と遺物..... 14

第4章 まとめ..... 80

図 目 次

第1図 調査地の位置..... 4

第2図 調査範囲..... 7

第3図 周辺遺跡..... 9

第4図 遺構配置図..... 12

第5図 A区想定図..... 83

第6図 B区想定図..... 84

表 目 次

第1表 大村地籍発掘調査一覧..... 10

第2表 土器計測表..... 79

第3表 住居址一覧表..... 86

第1章 調査の経過

第1節 事業の経緯と文書記録

- 平成元年9月29日 平成2年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 11月9日 平成2年度補助事業計画書提出。
- 平成2年4月4日 平成2年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。
- 4月4日 平成2年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 5月10日 平成2年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 7月24日 平成2年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月10日 平成2年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 9月12日 平成3年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 10月8日 塚田遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 10月12日 平成2年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 10月15日 平成3年度補助事業計画書提出。
- 11月1日 平成2年度団体営業場幣信事業大村・雁金地区塚田遺跡埋蔵文化財包藏地発掘調査委託契約の変更契約を結ぶ。
- 平成3年3月30日 塚田遺跡埋蔵文化財拾得物届及び同保管証提出。
- 3月30日 塚田遺跡の発掘調査終了届（通知）提出。
- 3月31日 平成2年度文化財保護事業補助金確定通知。
- 4月10日 平成2年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）確定通知。
- 10月9日 平成3年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）内定。
- 10月15日 平成3年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 11月1日 平成3年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 11月20日 平成3年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 12月27日 平成3年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 平成4年1月23日 平成3年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

第2節 調査体制

調査団長 松村好雄（松本市教育委員会教育長）

調査担当者 新谷和孝、高桑俊雄、久保田剛（社会教育課）

調査員 西沢寿晃、松尾明恵、三村肇、森義直、横田作重

協力者 青木雅志、赤羽章、赤羽さだ子、赤羽貞人、赤羽紀子、浅輪敬二、新井寛子、五十嵐周子、石合英子、石川末四郎、伊藤宗子、上原松子、天下恵二、太田千尋、大谷成嘉、大塚婆娑六、岡部登喜子、上條妙子、上條尚美、北沢達二、北村洋、窪田由美、久根下三枝子、倉科久子、與喜義、小瀬川厚子、兒玉春紀、小林謙次、小林文子、小松房子、小松正子、佐々木保二、瀬川長広、袖山勝美、瀧澤隆男、瀧沢葉子、瀧沢龍一、田口吉重、武田睦恵、田多井亘、田村かつよ、竹村恵津子、竹村栄美、竹村初子、堤加代子、鶴川登、中島新嗣、中村朝香、中村嵩、中村安雄、西村好、巾崎助治、橋本安子、服部寛、林昭雄、平林薰、藤井源吾、藤井久子、藤井マツエ、藤本利子、二木茂雄、牧久雄、丸山恵子、三沢元太郎、宮川頃啓、三代澤武人、村田界司、村山牧枝、百瀬義友、矢崎寛子、矢島利保、米山禎興

事務局 荒井寛（社会教育課長）、田口勝（課長補佐）、熊谷康治（課係長）、直井雅尚、関沢聰、木下守（H3～）、竹内靖長（H3～）（主事）、荒井由美、山岸弥生（H3～）

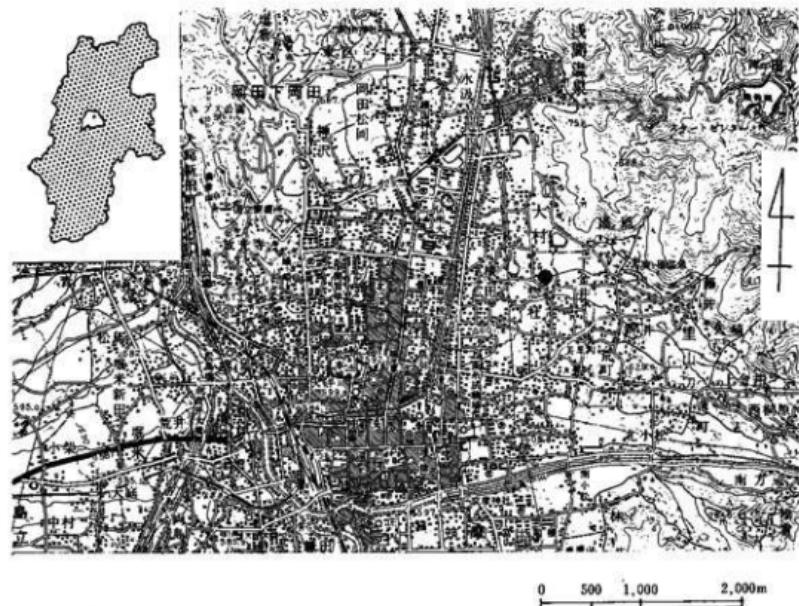


第2章 遺跡の環境

第1節 調査地の位置

調査地は松本市街の北東方向、大村地区の南端に当たる。東には美ヶ原高原に連なる袴腰川が迫り、美ヶ原温泉まで1kmという場所でもある。以前は水田地帯であったようだが、現在では西に大六川を、また南に藤井沢を隔て、市街化した横田・惣社地区がこの地に押し寄せてきている。一帯の標高は611~613mで南南西へ向いて僅か傾斜している。

調査は水田利用の小堤が撤去できなかったため、便宜的に大六川寄りのA区、藤井沢寄りのB区と2地区に分けて実施した。ここは小字名として渋田・坪川・大豆田などの名が残っており、割に古い開田であることを示している。



第1図 調査地の位置

第2節 地形・地質の概説

本調査地点は松本市街の北東部、美ヶ原高原の山麓にあり、南流する女鳥羽川により形成された扇状地の東端と、西流する薄川により形成された扇状地の北端が接する、標高612m付近にある。現在はこの両者により形成された原地形面を女鳥羽川の堆積物が厚く覆い、更に東部山地より流下する藤井沢が遺跡付近を流れ、市内の清水1丁目付近で女鳥羽川と合流している。

この塚田遺跡と直接関係のある女鳥羽川は、武石峠(1810m)付近から流れ出す中の沢と、三才山峠(1500m)から流れ出す本沢、袴越山(1752m)から流れ出す舟ヶ沢が三才山の一の瀬で合流し西へ向かって流れ、稻倉から流路を120°くらい向きを変えて南に流れ、松本市内に入り、本塚田遺跡を左に見て中央4丁目付近で90°流路を西に変え、白板付近で田川と合流している。延長は17.3km、高度差は約1200mあり、稻倉より上流は120/1000の勾配をもつ急流で、下流は21/1000の勾配である。そのため稻倉付近を扇頂として、本郷や調田に広い扇状地を形成し、湯川～藤井沢付近を境として薄川の扇状地と接している。この扇状地は第三紀層の内村層及び玢岩、各種安山岩の砂礫や、その風化物により形成されている。現在稻倉付近で急角度で曲がっているこの川も、同様な堆積物が城山一帯に見られ波打ロームを載せていることから、更新世(洪積世)末頃は西南方に向っていたことがわかる。その後城山一帯の山地の隆起により流路を次第に東にとり、稻倉→岡田西→大門沢へと流れを変え、岡田西の南北性の低地は女鳥羽川の自然流路の跡で、岡田町付近が少し高くなっているのは、女鳥羽川がつくった自然堤防と推定される。

この扇状地は形成後地盤の隆起により河岸段丘を形成し、右岸に三段の河岸段丘が認められる。地盤の隆起は断定できないが一様なものではなく、西側の方が東側より大きく傾動した可能性もあり、上段から矢作・神沢の第1面、伊深・岡田・反目・中原に至る第2面、現在の氾濫原の第3の段丘面とに、およそ区別することができる。したがって女鳥羽川左岸に当たる本調査地点付近は、現河床よりは幾分高くなっているが、現在の氾濫原と見られ、歴史文献上にもしばしば洪水に見舞われたことが記されており、また考古学上からも本遺跡の西北西約700mの桜橋上流左岸で、縄文晩期から古墳時代にわたる遺跡が270～280cmの深さから発見されていることからも証明される。

これらのしばしば起こる洪水は女鳥羽川の特性であり、上流域での年間降水量に対する年間流出量の比、すなわち流出率が大で、その上女鳥羽川の最小流量に対する最大流量の比、すなわち河況係数が極めて大であるという荒れ川であるためであり、更に上流の地層は統成作用が進んでいない第三紀層の軟らかな地層であるため侵食され易く、大量の土砂が運ばれ途中河岸沿いの風化した崖すい性堆積物も一緒にのみ込み、下流へ押し流し、平地では急速に堆積が行なわれている。また豊かな上流の水も水汲付近まで、これより下流では漸次伏流水となり、桜橋付近で湧水となっている。本調査地付近では湧水は見られないが地下水は高く、-70cm付近で地下水の第1の層に当たる。

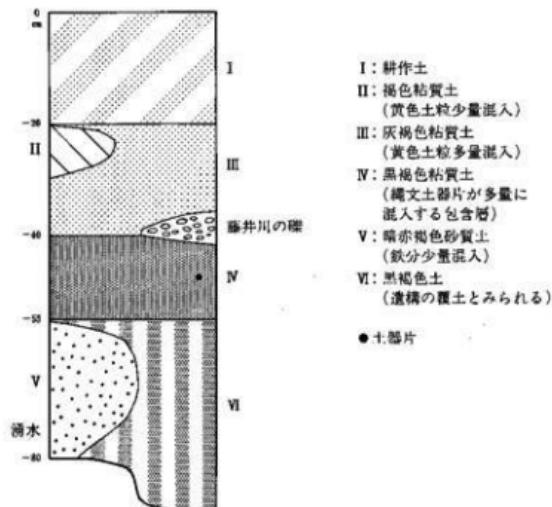
地表付近に薄川の堆積物は見られないが、地形上及び深部では女鳥羽川扇状地と接しているので、

概略を述べると、薄川は三峰山や厨峰付近を源流として、鉢伏山の東北のふもとを西北に流れ、途中南北からの沢を合わせて入山辺地区の西端付近を扇頂とする扇状地を形成している。堆積物は第三紀内村層の堆積岩と閃綠岩・ヒン岩・安山岩などである。

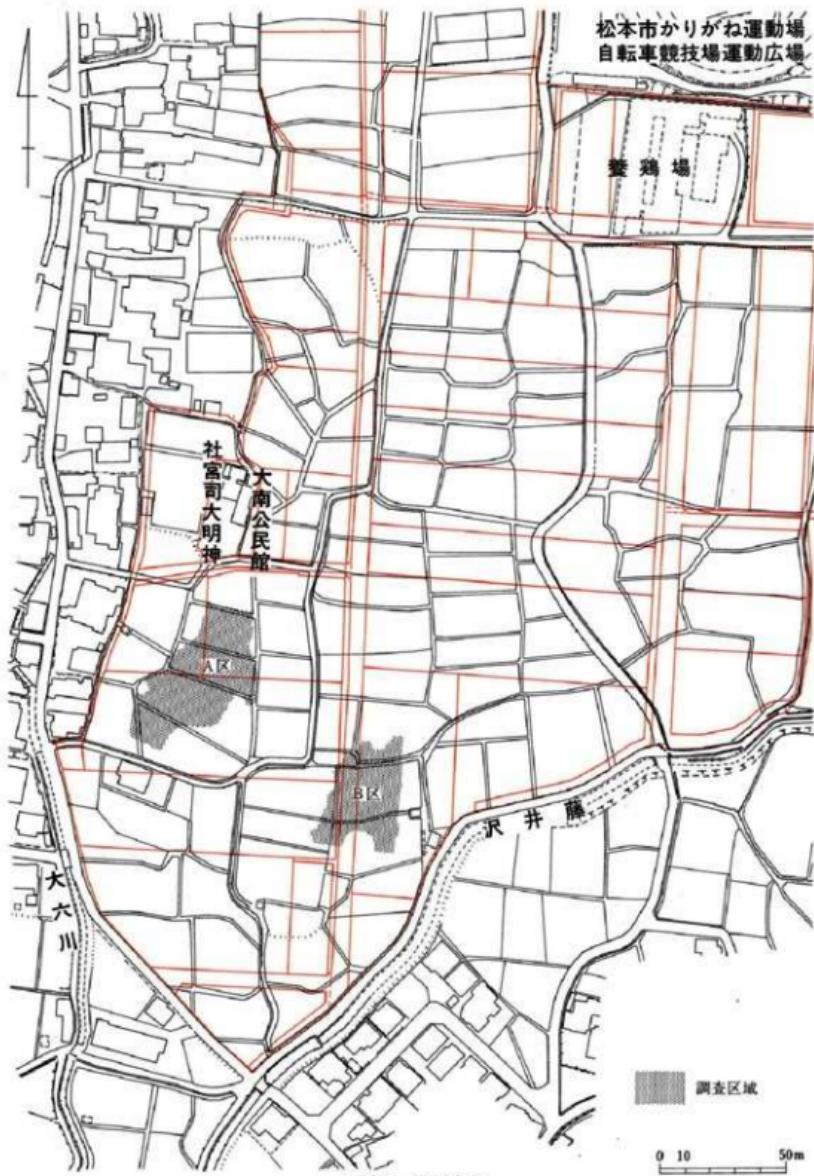
調査地付近の堆積物

女鳥羽川は洪水の度に上記の原因により、多量の土砂を運搬堆積させるため、その流路は急速に天井川化して絶えず首を振り、時代の異なる何層もの堆積物が重なっている。これに対して、湯川系の藤井沢の礫がレンズ上にはさまり、調査地域の土層上部を形成している。

これを土層柱状図で見れば、まず第1層の耕作土は平均20cmの厚さであり、この下の第2層は調査区南東に厚さ10cm程の褐色粘土質の層として存在するのみである。第3層は地下水により溶脱還元され灰色を呈するが、黄色の溶脱物が斑状に存在しており、第3層全体としては灰褐色土を呈し、厚さは15~20cmである。第4層は腐植の多い黒褐色粘土質で、縄文土器片を多量に混入する包含層であり、平均15cmの厚さである。第5層は砂質土の溶脱物（酸化鉄）沈澱層で暗赤褐色を呈するが、存在する場所としない場所がある。調査区南東隅ではこの第5層から多量の水が見られた。第6層は黒褐色土層で腐植に富み、遺構の土と推定される。



土層柱状図



第2図 調査範囲

第3節 周辺遺跡

塙田遺跡が存在する大村地籍では過去数多くの遺跡発掘調査が行なわれてきた。本遺跡はその南端で、緩やかな傾斜の下側に位置している。広い範囲に及ぶこれら調査の成果を中心に、周辺の遺跡について述べてみたい。

縄文時代 まず遺構が発見されたものについては、柳田遺跡のⅠ次調査で住居址3軒⁽¹⁾、立石遺跡で同2軒⁽²⁾がある。これらは縄文中期から晩期の土器を伴っており、集落の一部を形成していたとみられる。この他、高田・大音寺・新潟南裏・大輔原において、土器・石器を採集していることから、当地東側の山腹より山麓にかけて、この時代の遺跡の分布が予想される。また本地籍からは外れるものの、平安時代までの大集落を確認した里山辺の壇の内遺跡でも中期初頭の住居址6軒を調査している⁽³⁾。

弥生時代 これまで柳田で後期土器、大音寺で太形蛤刃石斧を得ている程度で、遺跡としての確認はなかった。しかし平成3年度に調査された大村古屋敷遺跡で後期の住居址17軒が発見され⁽⁴⁾、当時この一帯にも集落が営まれていたことが明らかになった。

古墳時代 本地籍の東側に迫る山頂には妙義山古墳群、金鏡製の冠を出土している桜ヶ丘古墳⁽⁵⁾、更に里山辺には御母家古墳がある。前出の古屋敷遺跡において古墳中期7、後期8、末期1の計16軒、これと隣接する前田遺跡でも2軒の住居址を調査した⁽⁶⁾。古墳との関係は深いものと考えられる。立石、柳田両遺跡でこの時代の土師器・須恵器を、また妙義山中で確認された新切古窯址からは末期の須恵器を得ている。

奈良・平安時代 この時代の遺構は多数発見されている。柳田遺跡のII次調査で奈良時代の住居址1軒⁽⁷⁾、大輔原遺跡でも同期の大形住居址が1軒検出された⁽⁸⁾。後者からは円面鏡を得ている。更に1986~89年にかけて行なわれた大村遺跡の一連の調査⁽⁹⁾では合計50軒に及ぶ住居址が発見された。特にⅦ次調査として行なった市営野球場は大村遺跡の北限と考えられている。この他、前田遺跡で1軒、古屋敷で27軒（うち2軒は奈良時代）を調査しており、大村一帯に広がる大集落を想像できる。また平瓦・丸瓦等の古瓦が数多く出土しており、廐寺跡等が推定されたこともあった。

以上のように、この大村地籍ではほぼ全域といつていい程の範囲で発掘調査が行なわれており、縄文から平安時代という長期に亘って、繰り返し集落が営まれていたことが明らかになってきた。

(1) 松本市教育委員会 1979『松本市大村遺跡群柳田遺跡分布確認調査報告書』

(2) 1989年に大村Ⅵ次調査として発掘を行なった。

(3) 1990年8月から12月にかけて行なわれ、1992年3月に報告予定。

(4) 1993年3月に報告予定。

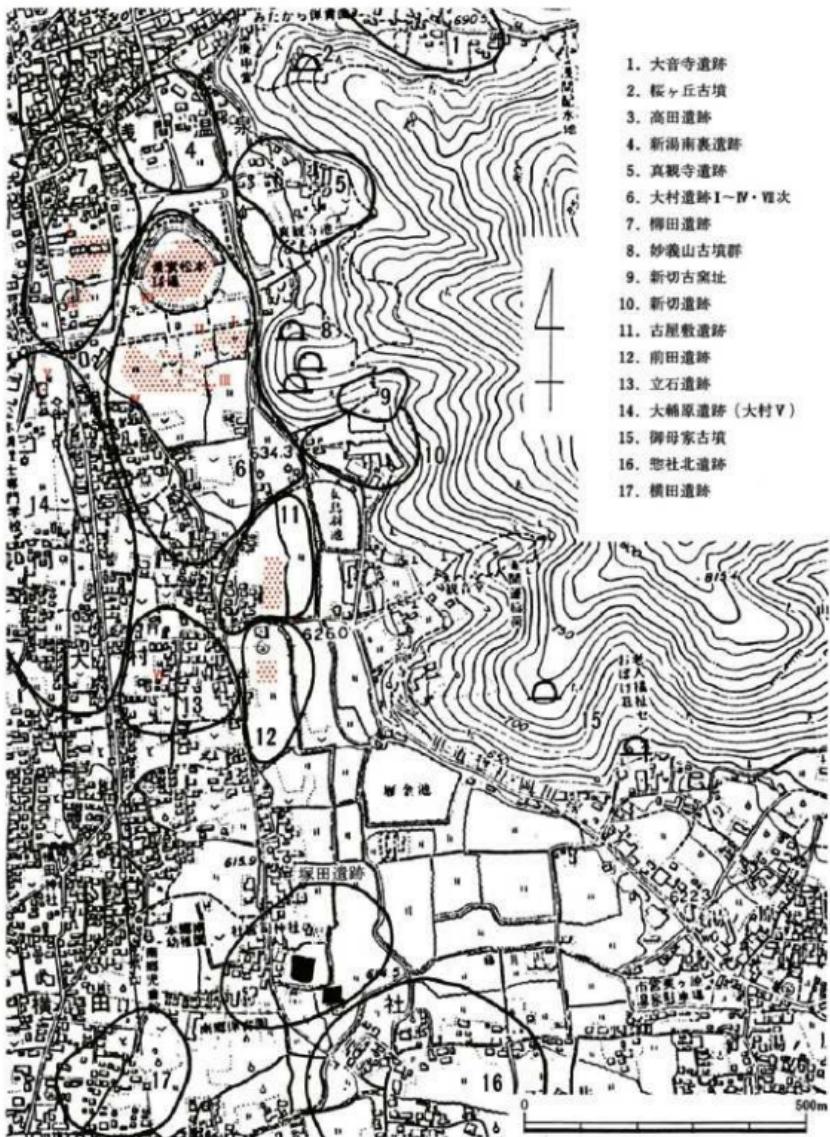
(5) 本郷村教育委員会 1966『信濃浅間古墳』

(6) 1993年3月に報告予定。

(7) 1990年に発掘調査を行なった。

(8) 1989年に大村Ⅴ次調査として発掘した。

(9) Ⅲ次調査については、『大村遺跡・古瓦を出土する平安時代集落址の発掘調査報告』(1988)がある。



第3図 周辺遺跡

調査年度	調査原因	遺跡名	調査名	発見された遺構	出土遺物	備考
1950 (S 25)	柱根の調査	大村 常山	掘立柱建物址1			
1951 (S 26)	出土瓦の調査	大村 庵寺跡				
1965 (S 40)	新産都市指定地区埋蔵文化財 緊急分布調査	大村	大村 庵寺跡	暗渠排水	平瓦・丸瓦・軒丸瓦、 土師器、須恵器、灰陶 陶器、宋鐵	平安
1966 (S 41)	大村庵寺跡確認のための学術調査	大村	大村 庵寺跡		平瓦・丸瓦・軒丸瓦、 土師器、須恵器、灰陶 陶器、綠釉陶器、自然 遺物	平安
1979 (S 54)	分布確認調査	柳田	柳田I	整穴住居址3、集石3	繩文土器、打製石斧、 石錐、石凹、磨石、 石錐、骨類	繩文
1986 (S 61)	庭球場建設に伴う緊急調査	大村	大村I	整穴住居址1、整穴状造構1、 掘立柱建物址4、柱列3、 溝3	平瓦・丸瓦、土師器、 須恵器、灰陶陶器、 打製石斧、加工木材、 自然遺物等	平安
	推定信濃國府調査	大輔原	信濃 國府V	整穴住居址5、ピット12、集 石2	土師器、須恵器、灰陶 陶器、四石	古墳 ～平安
1987 (S 62)	クラブハウス建設に伴う緊急調査	大村	大村II	整穴住居址2、土坑1	土師器、須恵器、灰陶 陶器、帯金具	平安
1988 (S 63)	市営住宅建設に伴う緊急調査	大村	大村III	整穴住居址22、整穴状造構 2、土坑18、溝1	平瓦・丸瓦、土師器、 須恵器、灰陶陶器、綠 釉陶器、鉄製品、石錐 等	平安
1989 (H 1)	市営住宅建設に伴う緊急調査	大村	大村IV	整穴住居址24、掘立柱建物址 1、土坑50、溝10	平瓦・軒丸瓦、土師器、 須恵器、灰陶陶器、綠 釉陶器、磨石、刀子	奈良・ 平安
	教員住宅建設に伴う緊急調査	大輔原	大村V	整穴住居址1、土坑20	土師器、須恵器、灰陶 陶器	奈良・ 平安
	民間住宅建設に伴う緊急調査	立石	大村VI	整穴住居址2	繩文土器、石斧、石 錐、土師器、須恵器	繩文・ 古墳・ 平安
	市営野球場建設に伴う緊急調査	大村	大村VII	整穴住居址2、土坑1、溝4	土師器、須恵器、灰 陶陶器、石錐	平安
1990 (H 2)	民間住宅建設に伴う緊急調査	柳田	柳田II	整穴住居址1、整穴状造構1、 掘立柱建物址3、ピット20	繩文土器、土師器、須 恵器、石錐、打製石斧	繩文・ 奈良
	団体営は場整備事業に伴う緊急調査	柳田	柳田	整穴住居址47、土坑30、配石1、 屋外土器埋設6	繩文土器、弥生土器、 土偶、上鉢、下鉢、 石錐、石斧等	繩文・ 弥生
1991 (H 3)	団体営は場整備事業に伴う緊急調査	前田	前田	整穴住居址3	土師器、須恵器	古墳・ 平安
	団体営は場整備事業に伴う緊急調査	古屋敷	古屋敷	整穴住居址67、土坑105、墓址4、 ピット525	繩文土器、弥生土器、 土師器、須恵器、灰陶 陶器、綠釉陶器、石器 (扁平片刃石斧、砾石等)、 铁器(刀子、鉄具)、 金属製品(銅鏡、八棱 鏡等)、平瓦	弥生 ～平安 ・中世 ・近世

註) 大村一書の過去の調査は遺跡名と調査名が混亂しており、統一がなかった。そのため今回の調査にあたって、上記のとおり整理した。

第1表 大村地籍発掘調査一覧

第3章 調査成果

調査の概要

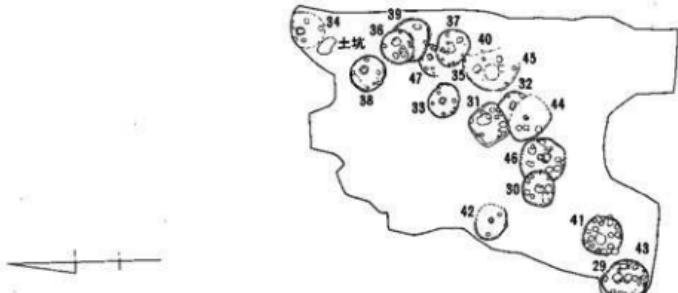
今回検出した遺構は、住居址では縄文時代中期後葉4軒、弥生時代後期1軒である。この他に住居址と同時期の土坑が30基、時期不明の配石1、屋外に埋設された縄文土器6などがあった。住居址の中には2軒の方形の敷石住居址がある。そのうちの1軒には入口部を明瞭に示しているものがあった。住居址内に祭壇をもつものが3軒あり、祭壇施設としては石を円形に配しているもの(2軒)や床面の一部を高くして、祭壇域をつくっているものがある。後者は土器(把手付片口壺)などが使用(供え)されたまま残り、焼失住居である点を考え併せれば、祭祀の様相を残す好資料となろう。

これらより出土した遺物は、縄文土器が90箱、石器が10箱と非常に多い。このうち特筆すべきものとして、住居址床面から得られた完形大形の釣手土器と、住居址のピットから出土した有孔鉢付土器がある。特に有孔鉢付土器は今回唯一のもので、そのあり方とともに縄文時代中期初頭から発生したこの種の土器の変遷を知る上で貴重な1点である。土製品には土偶が33点と多いが、これは脚部を中心としている。他にはミニチュア土器6点、それに完形の土鈴も2点あり、この1つは長さが7.7cmもある大きなものであった。

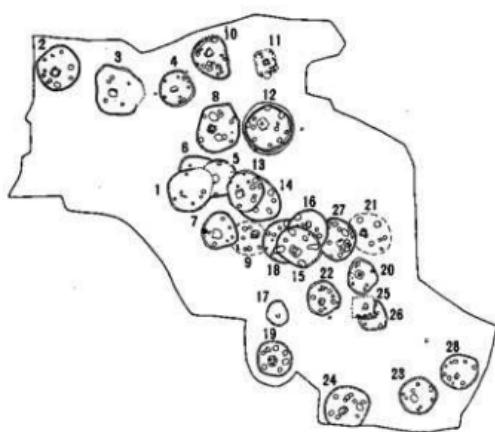
縄文時代中期後葉の土器はいわゆる唐草文土器が主体をなし、加曾利E系、梨久保B式といわれるものもある。時期的には曾利III式期併行のものを中心に、曾利I・II式期、わずかにIV・V式期のものも見られる。ちなみに敷石住居址は2軒とも曾利II式期であり、また祭壇のある住居址は全て曾利III式期に属する。

大村地区では昭和25年以来、16か所(地点)の調査を行なってきた。今回得られたこの成果は当地区のみならず、沖積地に立地する縄文の遺跡としては最大級のものであり、また集落としては縄文時代の中期後葉のみを中心で営まれたという点から注目に値する遺跡である。

なお今回の調査は面積こそA・B区合合わせて2555m²であるが、事業の性質上11月初めより2月下旬の厳寒期にかけて行なわれ、冬期に加え堆積土は地点によって微妙に異なり、検出には困難を極めたのも事実である。また現在、遺物は整理中のため、それらを詳細に検討・提示することもできなかった。その点御諒解を頂きたい。



B区



A区

0 10 20m

第4図 造構配図

A区全景(南より)





手前は5住。右側6住(南から)



焼土は全く見られない

手前の5住・6住（いずれも縄文）
を破壊し、つくられている。

扇形プランがおもしろい。床面は中央部がゆるやかに凹んでいる。
覆土色は周囲の縄文住居址より黒く明瞭である。

炉は板状の石を立てて石圓炉としているが、焼土は全く見当たらない。
遺物少ないながらも波状文をもつ盤等から今調査唯一の弥生時代後期の
ものとした。



A区北東隅に位置する。床面は黄褐色ブロックが入り、堅くなっている。炉・柱穴等の施設は良好であるが、遺物はあまり多くない。

一边が1mを越える見事な石圓炉である。

入口側（南東）は上部平坦な石を用い、低く設置してある。

隅も石を埋め、丁寧につくられている。

炉底は一面焼土となっている。



切ゴタツ状の石圓炉

第2号住居址



3住は手前、向こうに2住が見えている。床面は後世の水田耕作等が影響した鉄分が沈澱する黄褐色土を呈しており、他の住居址にもこのような傾向が見られる。主柱穴は4本、床面から20cmの深さがある。なお右（東）側壁は礫層の混入のため不明瞭となっていた。



抜去された跡と残った炉石

炉は当初四方に石が配されていたが今は一方に石が残されており、他は抜去されている様子が明瞭である。焼土も残存していた。

第3号住居址



小形の住居址である。床面は堅く良好。下の埋設土器の他に南東壁上、屋外（矢印の箇所）に正位で、また北壁外にも 1 点土器が埋設されていた。



炉は中ぶりの円錐を使用した梢円形の石圓炉で、焼土も遺存している。

埋甕は完形の深体が南東壁際逆位で埋められていた。中は中空となっていたが、底部が抜け落ち、土が泥状となつて、下部に溜まっていた。

第 4 号住居址



手前に13住、向こう側に6住と重複する。

トレンチを入れ、これらとの新旧関係をつかんだ。床面は堅く良好である。

炉は一辺に角張った割石を配しているのみで、明瞭な炉石抜去の痕跡は見られないが、抜き取りの可能性もある。

焼土はごく少量が認められた。

埋甌は南壁や内側に2個遺存する。一方は胴下半を欠き、もう一方は胴部を大きく欠いていた。

これらは唐草文系の深鉢で共に逆位に埋設されていた。両者に切り合はないが、建て直しの可能性も考えられる。

遺物量はごく少ない。



第5号住居址



弥生時代の1住（左上）に大きく破壊されている。

本址調査中に手前の5住の炉が出現し、本址より新しいと判明した。

床面には堅さも見られず、とらえにくい。炉についても焼土・炉石等がなく、確認できない。

また大小のビットが多數検出できたが、柱穴と想定するものも見い出せない。

なお出土遺物は比較的多い。これらの土器からは曾利Iという本道跡としては最も古い時期をあてている。



遺物出土状況(南から)



上部の大きなかたまりは本址より新しい土坑のもの

第7号住居址(1)



北壁際に検出した多数の甕は、祭祀的な施設「祭壇」と考える。手前側（南）を入口と想定すると、一番奥まった場所に当たる。拳～小児頭大の60個以上の甕は直径80cmの円形状を呈し、周縁が高く、中央が凹まったよう設置されている。ここは火熱を受けたような痕跡は見い出せないが、少量の焼骨らしきものが遺存していた。住居並内からの遺物は復土上層から床面まで比較的多い。なお最後に床を破壊して埋設土器などを探したが、見当たらなかった。



炉は内部に石があった痕跡をとどめている。

石の抜き取りはこのように全くないものと一部を残すもの。そして内側に倒したものなどが見られた。施土はほんの僅かであるが認められた。

第7号住居址(2)



住居址の掘り込みは黄褐色土層に達し、床面にもマダラ状に同色土が見え、堅い状態であった。炉は四方に石が配され、燒土も見えている。

埋蔵は住居址南部の壁寄りやや内側に逆位に埋設された2点があった。

深鉢土器の胴中部以下を欠くものと、胴下半部を欠き蓋石を乗せたものである。土層観察では後者が新設したものと思われる。やはり建て直しなのであろうか。また西部壁際には完形の釣手土器が転じていた。遺物量は比較的多く、曾利IIIのものを中心とする。



上は釣手土器、下は磨製石斧

第8号住居址



プラン・床面等はわからず。炉と周辺のピットから本址を想定した。

炉は方形石圓炉である。大きな炉石が内側に倒れ込んでいた。内部には焼土も残っている。

遺物は少ないながらも出土、本遺跡では最も新しい時期、曾利Ⅶ式期と考えている。



卵形の住居址である。床面は黄褐色土層上となり、割合に明瞭である。

炉は3個の大石を用いた石圓炉で、炉底には焼土もよく残っている。

中央南西部には壁から離れて、達位の埋設土器が位置する。この埋甕は胴下半部を欠き、蓋石を乗せている。

こちら側（南西部）を入口と想定すると、炉を隔て奥まったところに祭壇が位置する。この祭壇は奥の2本の柱穴を結ぶ周溝を埋め、更に壁の一部を拡張し、設置されている。



第10号住居址(1)



上部は中空のままで、埋設当時はかなりの空間があったのだろう。



中央部は平坦に、周縁は高くなるように設置してある (52×48cm)。

第10号住居址(2)



転入した石の中には石器も多く含まれている。



手前側が入口部。周縁と炉部のみ石が残る。(西南西より)

第11号住居址(1)



南側の石を敷いた様子

鐵石住居址である。掘り込みはわからないが、安山岩の平石あるいは自然石を割った偏平な石を用い、方形の周縁に一列に並ぶ。

四角を意識したつくりであり、明斜小屋城にもこのタイプが見られる。曾利Ⅲ期の土器片も石の代わりに使われていた。西辺中央部は平石が斜めに置かれ、小さく突出し、ここが入口と想定する。石のない中央部にははっきりした床面はないが、やや堅いところをとらえている。

炉は方形石圍炉で廃棄時に投入したものか石がぎっしりと入っていた。なおこの炉中には焼土が全く見られず、またピット等も検出できなかった。

曾利Ⅴ式期と考える。

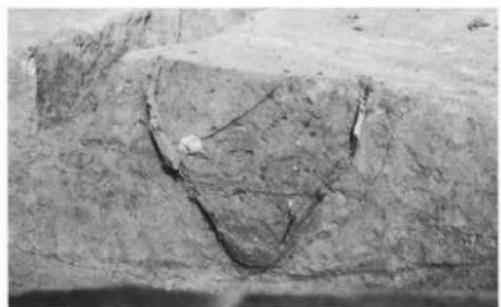


石と共に敷いた土器片も見えている。



比較的小形の炉である。きちんと石組みしてあるが、焼土はない。使用頻度が少なかったためであろうか。

第11号住居址(2)



大きな住居址である。黄褐色土中まで掘り込まれ、非常に堅く平坦な床、ほぼ全周する壁際の周溝、大形で深い主柱穴と、いずれも今回調査したうちで特に明瞭なものであった。レンズ状堆積の覆土層は典型的な自然埋没を示している。また北西壁中に1個、垂直に設けられたピットが見られた。

炉石は一部が炉内に残るが、ほとんど抜き取ったようである。なお焼土も見られた。

周溝の途切れた南西部には胸上部から口縁部を欠いた深鉢が正位で埋設されている。出土遺物はこの埋甕を含め、唐草文系の土器を中心としており、量的にも多い。

第12号住居址



【第13号住居址】

北に5住、南に14住が重複する。トレンチを設け、前後関係をつかんだところ、本址は両者より新しいものと断定した。

床面は茶褐色土層中にあり、黄褐色土が斑点状に入り、堅く良好な状態である。

炉（写真）は二方に大石をもつ石開炉であろう。他に石を除去した様子はない。この内部には焼土も見えている。主柱穴は4本組のものと想定できる。

【第14号住居址】（写真なし）

北半分を上の13住に破壊されている。この切り合う部分に被熱された狭い箇所があり、石を伴わないものであるが、炉と考えた。主柱穴と考えられるピットは4個あり、この他13住内部分にも1個を想定できる。遺物量が少なく、時期は不明である。



16・18・27住と重複するが、本址が一番新しい。主柱穴は各々2個の重複で、住居を拡張したことを示している。いずれも床面から60-75cmの深さがあり、12住などと共にしっかりとしたピットである。

炉は炉底に多量の燒土、炉石の一部が遺存しており。ほとんどの石が抜去された様子である。

南東部壁際に廻下部を欠いた深鉢が逆位で埋められ、平石が蓋石に用いられていた。

遺物は今回調査したうちで最も量多く、覆土上層から床面まで一様に出土した。



蓋石を取るとやはり当初から空間があったようで、隙間から水と共に泥が浸入していた。

第15号住居址(1)



掘り込み途中、まだ床面まで達していない(南東から)



焼土は中央が凹んで残存する。更に酸化現象も加わり、黒くなつて出現した。他の住居址の焼土の様子もこれとよく似る。

第15号住居址(2)



16住（手前）と18住（右上）、（中央は15住）

【第16号住居址】

北の18住、南の27住は本址より古い。深い掘り込みの15住には本址西半部を破壊される。まず炉を確認し、トレンチを設けて床面をとらえた。

炉石は一部抜かれた様子がみえる。焼土は炉底と炉外床面上に広がる。柱穴は15住部分にも存在したであろうが、適当なピットが見つからない。

【第18号住居址】

切り合いのため南半部を失う。炉は15住に半分ほど破壊されるが、壁際に接近して位置する。かなり小形の石圓柱である。

遺物を検討すると東側には曾利W式の遺物の混入が認められ、この部分のプランがやや内側に小さくなろう。柱穴は壁寄りの4本をまずとらえたが、あとは切り合いのため不明である。



かなり上面から確認できた今回一番小形の住居址である。小さい割に土器類は多く出土した。床面はわかりにくく、十字にトレンチを入れ、炉石と遺物のレベルで床面をとらえている。

炉は中央部に3個の石が配されているが、振り込み・焼土等は全く見当たらず、炉石のようなものとしか言えない。またピットについても全く検出できなかった。

遺物は大片となっているものが多く、床面としたレベルより僅か高い、いわば覆土下層までに多出している。



第17号住居址



住居址周囲は礫混入土層である。遺物は検出時から床面に至るまで多量に出土し、特に中央部分に多く見られた。床面は暗黄褐色を呈し、堅い。炉は石閉炉であったが、一部を残すのみである。
主柱穴は 5 本組のビットが適當なものであろう。



床面近くの遺物出土状況（東から）

第19号住居址(1)



四んだ跡が残っている。
周囲の石は抜き去ったり、
また動かしたりして、内
部に落ち込んでいるもの
もあれば、原位置のもの
も見える。
焼土は炉底に広がり、堅
くなっていた。



台付壺形土器は4単位
の隆帯が入る。沈線地文
に隆帯で満巻文を付して
いるのは、曾利IIあるいは
曾利III期のものとなら
うか。遺物の残存状況も
よい。

第19号住居址(2)



トレンチを設定し、確認した住居址である。五角形のプランを呈する。やや突出する南側を入口に想定すると、炉を隔てて奥壁間に埋設土器が位置する。

茶褐色土中に掘り込まれ、床面には黄褐色土塊が見えている。

炉石はすべて抜かれ、そのうちの大きな板状の石が内部に投入してある。

柱穴は入口部を除く四隅のピットを当てたい。いずれもかなり深く掘り込んである。

埋設土器は2点ある。いずれも深跡を逆位にして埋めてあつた。両者とも底部を荒く打ち欠いたままの様子が見える。左側は綾杉を地文とする。左側には曾利Ⅲ、右側には曾利Ⅱ式の様相を見る。



第20号住居址



(南から)



トレンチで炉を確認した。プランは不明瞭で床面もはっきりせず、周辺のピットからプランを想定している。

炉は中規模の方形石圍炉で炉内は深く、焼土も多量に遺存し、炉石下部もよく被熱した様子が見える。南西隅には細長い丸石が立てられ、板状の石とは対照的である。石棒としての意識があつたものであろうか。

第21号住居址



東側（手前）に入口を想定している。
写真はピットを検出中のところ。
炉は一辺に長い石を用い、他は手ごろな
石で円形をなす石圓炉である。
床面上からは下の土鈴が1点、入口際
ピット中より土偶の足2点を出土した。

土鈴は大形で表面に五つの区画文が施され、その内外を剥突で埋めている。

なお本遺跡より出土したもう1点の土鈴はやや小形で、29件出土である（72頁）。体部は洗練のみで施文していた。



第22号住居址



入口を想定した南東から

遺物は検出時より覆土の上層部に多く、下層部は少ない。
床面は暗褐色土中であり、木炭粒が散在していた。
かはが石がすべて抜き取られ、燒土が中央にまとめて残っているのみである。
主柱穴は4本組と考えられる。



第23号住居址



西側は一部用地外となる。覆土中には木炭粒が多く含まれ、ピット・炉内まで入っている。床面は不明瞭でトレンチを入れ、決定した。

炉は手ごろな石がまばらに配置された石圓炉で、一部は抜去されたかもしれない。炉の掘り込みは浅く、炉底には焼土が遺存していた。主柱穴は4本を認め、西外にもう1本あるものと考える。



炉内には小ぶりの石が入っていた。これらの石を炉石として使用していたのかもしれない。このがの向こう側には廻部のみを残す大形の出っ尻土偶が1点転がっていた。

第24号住居址



26住の覆土中にある敷石住居址である。11住同様に本址は正方形を呈すと思われるが、上部削平中に北と東の列は崩失してしまったらしい。敷いた石は鉄平石もあるが、扁平円礫も使用している。こんな状況であるが、出土土器は割合に多い。規模も11住とほぼ同様であろう。

炉は三方に石を配した小形の石圓
炉で、北側を開口する。内部には焼
土も認められた。



第25号住居址



壳塚後南から撮影

上部の25住（敷石住居址）を除去すると本址が現われた。遺物は上部敷石下につぶされたような状態の土器が多く、中央部に目立っている。ただ床面近くには少ない。壁、床面は残存状況良好で、明瞭にわかる。炉は研石が抜き取られ、方形のピットとなっている。炉底には焼土が見えている。柱穴は大形2、中形2の計4個のピットが適当な位置にあり、ふさわしい。



第26号住居址



北側は15・16住に破壊される。南北に長いトレンチを設け、この辺りの住居址を確認し、更に徐々に土層を下げ、括がりをつかんだ。南側には壁より内側に2条の周溝を認めた。

炉は中央南西寄りに位置する。のことから入口は北東側と想定するが、この方向は本址のはかには17住があるのみである。炉石は1個のみが残るだけで、他は抜き取られてない。焼土は内部に見られず、かき出したかの如くに炉外に広がる。

写真的遺物はこの焼土上に転じた1点である。文様は4単位で胴部に椭形文が付き、曾利I式のものであり、住居址にはこの時期を与える。

第27号住居址



A区南隅に位置する。土層が判然とせず、徐々に下げて、やっととらえた住居址である。
床面は茶褐色土塊を混入する黄褐色土であるが、堅くもない。

炉は中ぶりの細長い石6個を用い、円形状に配した石圓炉である。全周せず、特に抜去した様子も見えない。
また内部には焼土も見当たらない。

ピットは12個検出したが、このうち5個が柱穴としてふさわしい。

掘り下げを一時中断したところ、その下からがが出現、更に下げる、上の状態に至った。
このような訳で、その後トレンチを何本も入れ、慎重に調査を進め、かなりの時間を費やしたのである。



第28号住居址



43住と重複する。北寄り（左側）に中心を置くのが本址である。この两者の床面は高低差もなく炉が2基出現したため、2軒と判明した。

炉は石西炉であるが、一部抜去されている。西壁寄りには埋設土器があり、その北側から土鉢が1点出土した。柱穴は43住に比べ、4個の深いピットが適当である。



埋設は唐草文の小形の深鉢が1点、正位で埋設されている。

第29号住居址



46住の西側を破壊してつくられている。炉は方形ピットの一方に大きな石を2つに割り、据えている。他は明らかな石の抜き取りの痕跡もなく、一応石置地床炉とした。

写真是東壁際に埋設された埋甕である。一部を被損するが、口縁から底部まで完形の深甕を正位で設置してあつた。

土器は被杉地文で、隆帯で縱に4単位、沈線で横位区画を意識させる。洗練後観察すると、土器内面は煤の付着が著しい。この内部には別個体の深甕の底部がやはり正位で置かれていた。
遺物から曾利III式期と考えた。



南東に32住があり、本址が新しい。覆土中には焼土があり、床と壁の一部が被熱している。また上屋に使用したのかロームが床面上に転じていたことなどから、調査者は焼失住居の可能性があると指摘している。遺物はかなり多く、特に中央付近から大きな礫を混じて出土する。別造構によってがの部分は大きな穴ができるが、その底部に焼土が遺存している。ピットは多数あり、この中には本址より新しいものも含まれているようである。

入口は方形プランの一辺、南西部分と想定する。なお遺物の中には土偶の足2点も見られる。

第31号住居址



掘る順序を間違えた。掘り下げ開始後、トレンチでプランを確認中、44住の炉を引っかけていた。その結果、本址は31・44住より古いことが判明した。

遺構は礎混入土層中にあり、掘り込みは浅い。壁、床面も礎が露出する。床面には堅さは見られず、出土した遺物の量も総量50点ほどと少ない。

炉は南北に長い石圍炉で、南・北隅にL字状に配されている。炉の掘り込みは浅く、底も床面と同様の状態、そして焼土も見当たらない。



第32号住居址



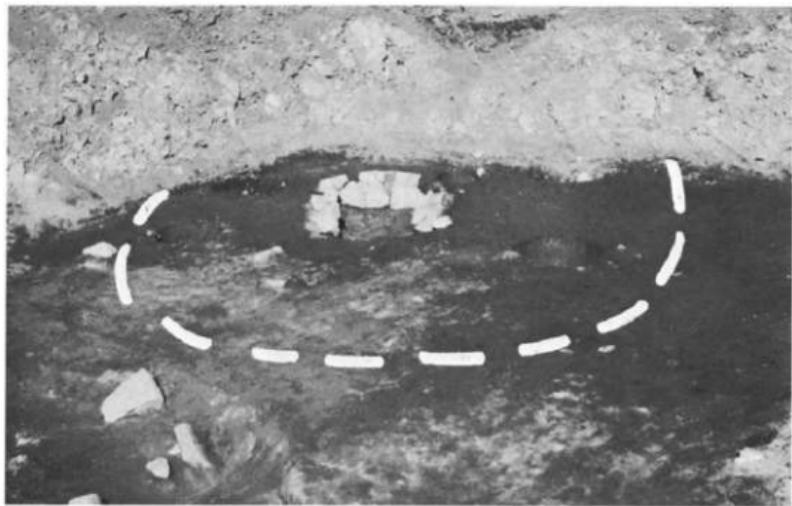
検出面から浅く、覆土中には砾が多く混入する。床面も平坦にはなるものの礫混じりで、堅さなどは全くない。がは3個の大石を三方に、一方は複数の小石でつくられる。炉底は礫混入土となっており、燒土は全く見当たらない。

主柱穴はこのがを囲む4個のピットで構成され、位置的にも適当なところである。



手前側が入口部方向

第33号住居址



入口部（南側）から撮影

重機による検出作業で突如炉が出現した。北側は調査区外へ続いている。

床面は黄褐色土で、南側に狭く、やや堅い面が残る程度で、破壊のプランは周辺のピットを含めた想定プランである。

炉はコの字形の石開がで、想定住居址入口部の方向を開口する。なお焼土は残存していない。



炉石はすべて安山岩の割石を用いているが、被熱したためか細かく割れてしまっている。そうすると焼土は一体どうなったのであろうか？



写真左上は37住、右上（破線下）は40住、手前（破線下）は45住とそれぞれ重複している。また中央の太穴は後世の土坑である。

床面は45住が砂、礫が目立ち、本址は土質となっているが、相互の比高差もなく、プランは判然としない。

炉は石1個が残るが、他の抜去された様子が見え、後土も僅か存在する。理設土器は西壁（想定）際に正位で深鉢が1点あり、ここから入口部を南西としている。土器は曾利III式併行の加曾利E系土器で、遺物も重複した45住の分も含め、曾利田式期の土器が主体となり、この両者は接近した時期のものと考える。

第35号住居址



39住の北側部分を破壊してつくられた小形住居址である。覆土浅い割に多量の遺物が遺存していた。床面は黄褐色土でやや堅さも残る。ピットのうち炉を中心とした4個が主柱穴としてふさわしい。南西壁寄りのピットからは遺存状態の良い土器が出土し、これを埋葬とすると、入口は南西部と考えられる。

炉は奥間に大きな板状の石が残っている。手前床面上に転ずる石は形状から見て炉石と思われる。
炉底には焼土が見られた。



第36号住居址(1)



出土遺物の量は特に多く、大小の石を混じえながら中央にまとまっている。この中からは土偶 1 点を得ている。

ピット出土の土器は今回たった 1 点の有孔脚付土器である。口縁から胴上部の肩を欠き、正位でピット底に位置する。土器内部には大きな平石と半円砾が各 1 個入っていた。この石が蓋石とも考えられるが、土器の欠損部が見つからないため、当初から、上部を打ち欠き、中に石を入れた可能性もある。変わった土器の種類、ピット底の位置など、他の埋蔵とは様子が異なる。また細かく観察したところ、胴部の内面と有孔部周辺に朱が塗ってあった。



手前に埋甌がある。向こうは47住

北に47住を破壊し、南で40住に破壊される。床面は黄褐色で堅さはない。

炉は石を除去した様子もなく、地床がなのであろうが、焼土も残っていない。

衛壁やや内側に土器が埋設されていた。土器は唐草文系の深鉢で、胴上部から口縁部を欠いている。正位で置かれ、埋設時の振り方も土器いっぱいのピットである。土層観察のため土器を截断した結果、内部は当初から土を入れた感じがした。



第37号住居址



主柱穴は4本、手前側張り出しへ入口部。石下には埋甃がある。(南西から)



炉は切りゴタツ状、手前の石が一段低い。



埋設時は空洞?

第38号住居址



炉の左手、2個の石に挟まれた高まり“祭壇”



覆土中に多量の焼土があり、柱穴内にも炭化材が多数見られた。床面は黄褐色土で起伏はあるが、燒土化している。

祭壇は炉の北西部にあり、奥行50~80cm、幅250cm、柱穴の間に位置する。人頭大の石2個が面臨にあり、ここには浅鉢や壺形土器などが底部を浅く埋められていた。周囲の床との比高差は5cmほどである。
この周囲からは他にも唐草文、重弧文等の深鉢、釣手土器などが出土した。



36住（上側）に北側を破壊され、南側（左）の47住に貼床される。

本址は途切れながら周溝が巡るため、これを確認してプランをつかんだ。床面は黄褐色土で堅く、部分的に焼熱している。

炉石の抜き取り痕が明瞭で、焼土残量も多く、長方形石匂型であったことがわかる。

入口部は南東と予想するが、ここは周溝が切れており、適当であろう。

ピットは4個が見えているが、柱穴には不向きである。

遺物総量は復土が浅いこともあり、かなり少ない。なお現場では47住より新として扱っているが、遺物より検討すると、本址が旧の可能性が高い。



第39号住居址



中央の炉は37号住居土中に検出した。矢印の埋甌が本址のものと推定するが、プランは全く不明。左下に35号、左下の炉は47号である。



炉は底面に土器片を数く。断面では炉石を抜去した様子が見える。焼土も遺存していた。

第40号住居址



床面は黄褐色土であるが堅さはない。
炉は大きな穴のみであり、炉石は抜き取ったと思われる。爐土も微量残存していた。

多数のビットは炉を囲むように位置する。埋設土器もビットに破壊されており、ビットの总数からは2度位の建直しを予想できる。



炉内には2個体程の唐草文系土器が出土する。曾利田式期に相当する時期を与える。

第41号住居址(1)



遺物は覆土上層から下層までかなり多く、土器は唐草文系のものが目立つ。石も多く、炉材として使用されたようなものもある。



炉上部にはこのように小石、土器類が投入されている。埋甌は逆位で炉の東側ピットにあったが、上部を破壊されている。



手前突出部(南南西)が入口部



検出面から浅い。南側は小さく突出し、東側はプランがつかめなかった。

床面は礫混入土で悪く、炉の高さで想定している。

炉はほぼ中央に位置する石圓炉であるが、小形で石組みも整った方形にはなっていない。焼土も微量である。
突出部の壁際には蓋石をもつ深鉢が埋設されていた。土器は底部を抜き、正位で埋められている。

第42号住居址



29住と重複する。床面は黄褐色土で、29住よりやや堅い程度。
炉は炉石が残っている。抜去した痕跡と焼土から長方形石團炉であったことを示す。
柱穴は29住に比べ、やや浅い4本組のピットを想定する。



左43住炉、右41住炉である。
双方とも炉石の一部が抜かれて
いるが、残存する炉石の上部レ
ベルには差がみられない。

第43号住居址



32住（上）調査中に本址のがが出現した。周辺は礎混入土が広がり、重機で床面近くまで下げたため、壁はわずかに一部が残る程度で、東側は不明となった。

床面の状態も良くない。

炉は方形石圓炉で、今回調査した中では一番小形のものである。内部には施土が微量遺存していた。

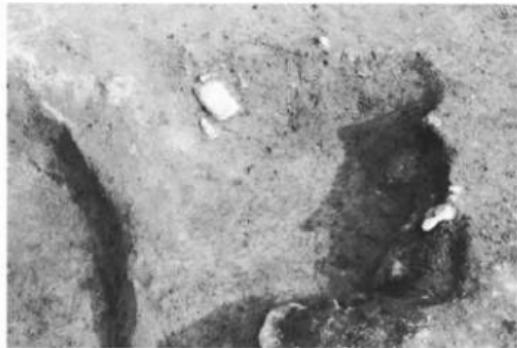
ピットは大きな3個を検出したが、主柱穴としては位置が良くない。またこのピット横に深鉢底部が埋設されていた。これは壁から1mほど内側に位置し、土器は胴部から上を大きく欠いてあった。

住居址の櫛の順序を間違えた。



出土遺物の量はかなり少ない。埋設土器は唐草文系の深体で、小さな底径から上部にやや外反して大きく広く、これから曾利W式期を与える。なお振り方は土器ぎりぎりの大きさであった。

第44号住居址



北側に35住と重複する。堆積土、出土遺物等に明瞭な相違もなく、前後関係がつかめず、また南東部ではプランも判然としない。ただ床面は小砾や砂質が目立っている。炉は後世の土坑に一部破壊され、堆土が微量に残る方形のピットを認めた。ピットは1個を検出したのみである。

左側は新しい土坑である。炉は石を抜いた跡があり。当初は石圓炉であった。

第45号住居址



大きな住居址である。西側を30住に壊され、南側は重機により壁を欠失している。

床面は暗黄褐色土を呈し、ゆるやかな起伏はあるが、堅さも見られる。

炉は北西側に大石を、他は小石を並べた石圍炉である。炉石は丸石など不規則なものを使用、炉底には焼土が残り、石も被熱している。

ピットは13個を検出するが、現場で柱穴と認められるものはなかった。

中央やや南東に炉が位置するため、北西からの入口を想定するが、この方向に同調するものは他なく、現炉基の焼土を検出するピットを旧炉とし、2軒の重複ないし拡張と考えることも可能であると調査者は見ている。



南を37住（手前）に破壊される。

炉はが石を三方に置き、炉底には浅鉢片を一面に敷いている。この中には焼土は見られない。

西壁際は蓋石をもつ埋甕が正位で、またその北端に口縁部と剥下半部を欠く土器が埋設されていた。土器は同時期、同文様のもので、建て替えの可能性を思わせる。



第47号住居址



4 住埋甕



5 住埋甕 1



5 住埋甕 2



10 住埋甕



7 住

出土遺物 土器 (1)



8住埋甕



8住



12住埋甕

8住の釣手土器は立体的な把手、交互刺突の文様が特徴的。20住埋甕は刺張り形、横位唐草文や区画文の消失などから、この両者は曾利Ⅲ式期のうちでも新・旧のもの。

19住台付壺形土器は曾利Ⅱ式期に相当できようか。



19住



15住埋甕

土器 (2)



20住埋甕



30住埋甕



29住埋甕

20住埋甕と29住埋甕は沈線ないし縦筋の地文の上に腕骨文が付く。前者のほうがやや古いのだろうか。
35住埋甕は加曾利E系土器である。30住埋甕を含め、これらは曾利III式期に含まれよう。



30住埋甕内



35住埋甕



38位埋器



38位釣手土器1

埋器は頸部が無文帯となり、強いくびれをもつ。その下に連続する交互刺突とS字状になる沈線が特徴的。右下は1対の把手が付く片口の壺形土器で、器形・文様に共通したものがある。曾利田式期に属しよう。
釣手土器は違うタイプのものが2点ある。1はアンバランスなもので、小さな体部の上に1対の大形の装飾的な把手が付き、その片方を欠く。2は天井部にテラスをもつブリッジが付くもので体部全部とブリッジのはんどを欠している。



38位釣手土器2



38位

土器 (4)



37住埋甌



42住埋甌

37住埋甌は典型的な、いわゆる唐草文系の土器である。
42住と47住埋甌の3点は加曾利E系の特徴がある。口縁部はキャリバー状に立ち上がり、渦巻文ないし曲線文(42住)が付くと思われる。



47住埋甌 1



47住埋甌 2

土器 (5)



11住



20住



31住



36住



土鉢29住



土鉢22住

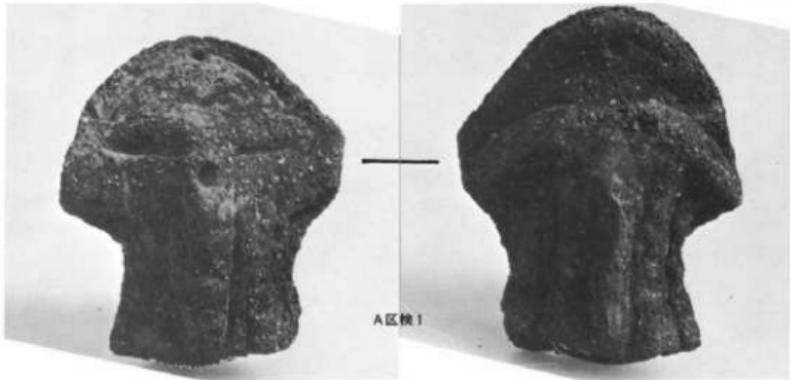


34住

土製品



土坑



A区块1

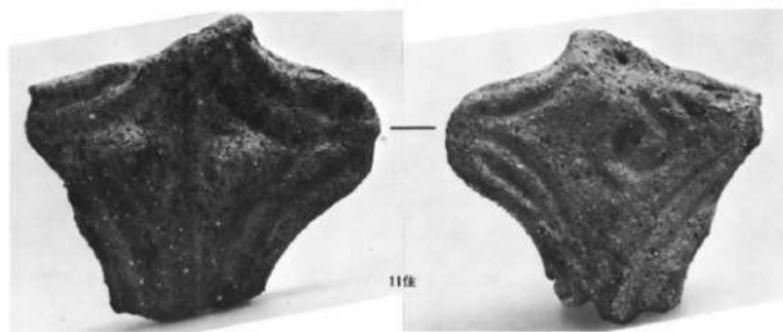


A区块2

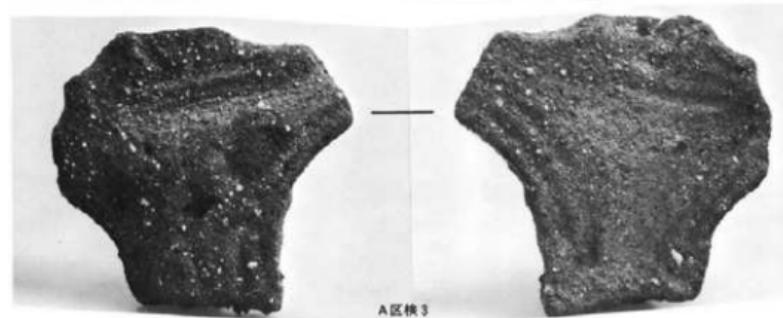
土偶 (1)



24住

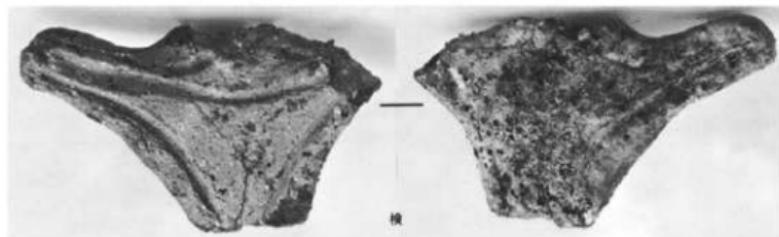


11住

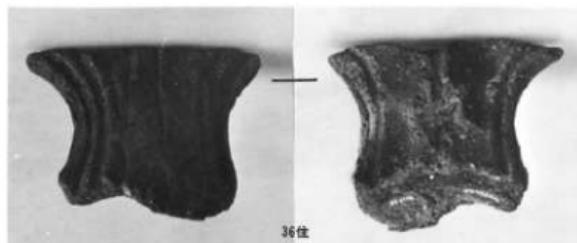


A区模3

土偶 (2)



横



36住



A区検 4



8住

土偶は34点を数えた。
このうち頭部のみを残す
ものが3点ある〔土偶(1)〕。
土坑とA区検1の2点は
よく似ている。平面半円
形の顔面、つり上がりした
目尻と隆起でつくられた
輪郭、眉毛等であり、特に
髪型（後頭部）には共通
するものを見る。

A区検2は少し異なるよ
うである。顔面輪郭は沈
線でハーフ面をなし、髪は
後頭部で渦を巻いている。

頭部を中心に残存するものは7点ある〔土偶(2)
・(3)〕。この中には片腕（檢出面）、両足（8
住）を残すものもある。24住出土のものは一番
大型、立体的である。胸背部のみで深く太い沈線
と細かい平行沈線で、主に両脇部を飾っている。
残存高約12cmを計り、完形ならば20cm位と予想
する。

これに対し両手・顎を欠く8住は高さ8.1cm、幅
4.0cmと小形である。下肢部は沈線で描かれ、爪
先は突出していたためか欠けている。

土偶 (3)



B区検



41住

41住

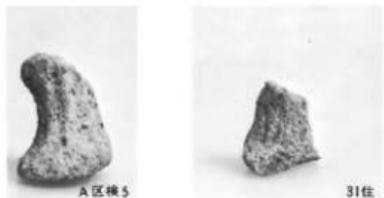
36住



22住

22住

31住



A区検5

31住

脚部は多い〔土偶(4)・(5)〕。これらには言わば「長グツ」形のものと、先端がぱっと開く「象の足」形のものがある。量的に前者が多く、また文様を見ても綾杉・渦巻などが丁寧に施されているのが前者である。

土偶 (4)